

## 編集後記

本学の設立構想が発表されてから50周年を迎えた本年度には、それを飾るにふさわしい二つの出来事があった。一つは、文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援タイプB（グローバル化牽引型）」に本学が採択されたことであった。もう一つは、本学陸上競技部駅伝部が「第91回箱根駅伝（東京箱根間往復大学駅伝競争）」に悲願の初出場を果たしたことであった。沿道に立てられた創価大学の旗幟は、もちろん疾走する選手を後押しするためであった。しかしそればかりでなく、そのはためきはグローバル事業を橋渡しに創立50周年へと走りゆく本学に声援を送ってくれているようでもあった。本研究所は創立50周年の節目を迎えるための準備を、創立者が発表した本学の設立構想の内容を想起し議論することによって歩み出している。

本研究所紀要『創価教育（第8号）』には記念講演を三本収録している。そのうちの二つは、駐日本特命全権大使の程永華氏による講演の内容である。一方は、「創価大学名誉博士号受章記念講演会（2012年4月2日）」での内容であり、もう一方は、「創立者池田大作先生訪中40周年記念講演会（2014年6月13日）」の内容である。これらの講演は創立者による国境を越えた対話の生きた証である。さらに記念講演には、ノーベル平和賞受賞者でコスタリカ元大統領のオスカル・アリアス・サンチェス氏による祝辞が収められている。これは第40回創価大学卒業式・第28回創価女子短期大学卒業式のなかで本学卒業生に贈られたものである。「教育が価値を伴わない事実、感情を伴わない知識の単なる概要であるならば何が起きるか、賢者ではない学者、人間ではない専門家を育てた時、何が起きるかを」知らねばならないという言葉は、あらゆる分野の教育関係者がその意味を噛みしめるべきメッセージであった。

研究論文については三本を収録することができた。そのうちの二つは英語による論文である。一つは、Rich Whitney “The Transformational Leadership of Daisaku Ikeda: A Diamond Polishing Diamonds” である。この論考の中心関心はリーダーシップ理論の観点から池田大作のリーダーシップの特性を捉えることにあった。Jason Goulah “Daisaku Ikeda and Poverty Eradication: An Introductory Review” は、池田大作の貧困撲滅の考え方と提案を整理した論文である。これらの論文から認められるのは、リーダーシップあるいは貧困という新たな視角から池田大作研究の地平を模索しようという挑戦的な試みである。そして論文のもう一つは、松井慎一郎氏による『『人生地理学』の思想史的意義』である。この労作のなかで引き出された牧口常三郎の国家像は、吉野作造や石橋湛山がそうであったように、道義国家としての日本であった。

講演については全部で三本を収録している。一つ目は吉郷研滋「草創期の学生生活支援—創立者と生活協同組合の誕生と活動—」（2014年6月27日）である。本学草創期にはすべてが教・職・学による手作りであった。この講演から大学生協もこの例外ではなかったことが伝えられている。二つ目の講演収録は斎藤ベンツ・えく子「創

立者とロシア—通訳手記—」(2014年10月31日)である。これを読むと、斎藤氏が通訳をしながら目の前で聞きしした創立者と対談相手との生々しいやりとりのなかに、創立者の人と思想が埋め込まれていることが感じられる。そして講演の最後として、神立孝一「創価大学の創立と創価教育」(2014年8月30日)が収録されている。ここでは、創価教育とは何か、創価大学の設立の意義はどこにあるのか、そして創価大学で実践される創価教育はどのようなものか、との問いが立てられている。講演のなかで述べられているように、これらは正答がすぐに見出せるようなものではないが、そうであったとしても、本研究所がこれからも探究すべき大切な問いが表現されている。

また、高橋強氏による報告「中国における『池田思想』研究の動向」はすでに11回目を数えることになった。そこからは中国における池田研究の広がりや深まりをはっきりと掴むことができる。

資料紹介として「『人生地理学』補注」補遺(第4回)を収録している。今後も引き続き牧口常三郎研究の第一人者であった斎藤正二先生の遺稿を本誌で紹介する予定である。各号の編集後記のなかでも繰り返して感謝の意を表明してはいるが、今回も遺稿資料の掲載をお許しくださった著者のご遺族に記して重ねて心からの感謝を申し上げたい。

その他では新刊として、池田大作／ジム・ガリソン／ラリー・ヒックマン『人間教育への新しき潮流—デューイと創価教育—』(第三文明社、2014年)、そしてまた『池田大作・言語と教育(Daisaku Ikeda, Language and Education)』(Edited by Jason Goulah, Routledge 2014)が紹介されている。

松井論文が浮き彫りにした道義国家論者としての牧口常三郎という見方、そして斎藤正二による牧口常三郎への評価、すなわち、牧口は『人生地理学』執筆時点で幸徳秋水、堺利彦、内村鑑三と同じく「朝鮮征伐」の用語の使用を避けた「普遍理性人」ないし「世界思想人」だったとする評価——この見方と評価は、戦後レジームからの転換が声高に叫ばれ、それが確実に進みゆく現在において、私たちの研究の準拠点として参照すべきものである。そしてその準拠点は、創立者による本学の設立構想、言い換えれば、なぜ本学がつくられたのか、というところに根底でつながっているように思われる。本号には特集として「創価大学設立構想50周年記念シンポジウム」の内容が掲載されているが、このシンポジウムの開催意図の一つはこれを想起することにあった。現在の問いを原動力にして過去を想起的に呼び起こすことがなければ、過去の精神は生き続けることはできない。そして想起なしには将来の構想もその足場を失うことになる。この足場の確保は本研究所で追求すべき大切な課題の一つである。

最後にひとつ付記することがある。

戦時下文学・ジャーナリズム研究の大家であられた故・高崎隆治先生のご遺族から、このたび、先生が所蔵されていた書籍・雑誌(約3千点)をご寄贈いただいた。先生は生前たびたび本誌にも寄稿してくださり、戦争経験に基づく断固たる平和への意志

と、膨大な資料に裏付けられたその研究姿勢は、つねに私たちの模範と仰ぐところであった（「戸田城聖の生きた時代—戦時ジャーナリズム研究の立場から—」『創価教育研究』創刊号、「作家・里村欣三と創価教育学会」『創価教育』第3号、「戦時下の《1943年夏》を語る—創価教育学会弾圧の前後—」『創価教育』第5号）。ご遺族のご厚意に心より御礼申し上げたい。この場を借りて、高崎先生のご冥福を胸奥より深くお祈りするとともに、先生のご遺志を引き継いで更に研究を深めてまいる決意を表明させていただく次第である。

2015年3月16日 (T.I. & S.U.)